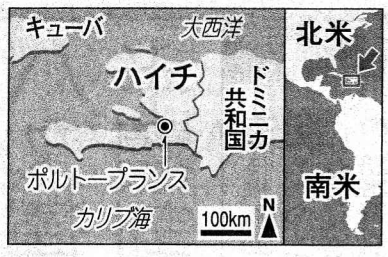


大地震に見舞われたハイチで、緊急医療支援活動を行う国際医療ボランティアAMDA（本部・岡山市）。政府機能がまひし治安が悪化する中で現地入りし、27日に帰国した菅波茂代表(63)＝同市＝に、現地の状況や今後の支援方針などを聞いた。（伊丹友香）

大地震襲ったハイチから帰国

支援活動 基盤整った

AMDA菅波代表に聞く

―ハイチの現状は。

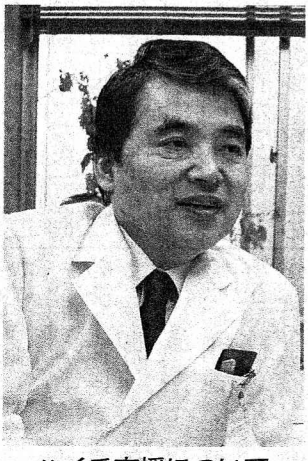
「治安が悪く、水、電気、通信など社会インフラも確保されていない。さらに民間支援団体を受け入れる組織がなく、出口のない救援活動になる。どこで撤退するかの見極めが重要だ。現地には医薬品や医療機器は十分にあるが、配給ができていない。治安はますますの悪化が懸念される」

―1984年のAMDA設立以来、初めて代表自身が緊急医療チームの一員として現地入りした狙いは。

「支援には現地の人たちとのネットワーク構築が欠かせないが、今回のように受け入れ政府がない中で活動するには、早急に相手を見つけねばならなかった。実際、（隣国の）ドミニカ共和国の日系移民でつくるドミニカ日系人協会、中南米で暮らす沖縄出身者、現地のカナダ系NGOとのパイプができた。活動基盤は整ったと思う」

―今後の活動方針は。

「安全面から、活動拠点はハイチ国内の国連敷地内と、ドミニカ共和国の国境付近の都市に限られる。当面はこの2カ所。医療ニーズは当初の外科手術から、一般診療へと変わってきた。国連からは足を切断した人への義足提供やリハビリ支援を要請された。復興期からは心のケアにも取り組みたい。一般診療は2月いっぱいがめど。心のケアを行えば1年以上の活動になる」


ハイチ支援について話す菅波代表

医療ニーズ 外科手術から一般診療に

復興期から心のケアも

―どのような心のケアを想定しているのか。

「スポーツによる心的外傷後ストレス障害（PTSD）ケアを考えている。ハイチやドミニカ共和国は野球が盛ん。特にドミニカは日系人協会と関係深いプロ野球広島カープのベースボールアカデミーがあり、協力得られそうだ。スポーツの力で人々の心をとめ、復興支援に役てたい」

―AMDAに求められているものは。

「人道的支援だけでは大切なことは『見捨てられていない』というメッセージを送り続けること。そこに希望が生まれる。野球による心のケアは市民参加にしたい。特にカープのアカデミーとつながりのある広島県民、国際貢献推進条例を持つ山口県民の協力に期待している。少年野球の交流などに市民が参加することで、新しい国際貢献の形が生まれるのではないか」

ハイチの首都ポルトープランスから北約60キロのサンマルクの病院で医療活動するAMDAの医師（手前）ら＝19日（AMDA提供）